

## 第15回 札内川技術検討会が開催されました



第15回札内川技術検討会の様子（帯広第2地方合同庁舎にて）

第15回札内川技術検討会が令和6年3月19日（火）に開催されました。

### 札内川技術検討会 委員名簿（敬称略、五十音順）

氏名	所属等
泉 典洋	北海道大学大学院 工学研究院 教授
大串 弘哉	国立研究開発法人 土木研究所寒地土木研究所 寒地水圏研究グループ 寒地河川チーム 上席研究員
柿沼 孝治	国立研究開発法人 土木研究所寒地土木研究所 寒地水圏研究グループ 寒地河川チーム 上席研究員
中村 太士	北海道大学大学院 農学研究院 教授
藤巻 裕蔵	帯広畜産大学 名誉教授
柳川 久	帯広畜産大学 教授
渡邊 康玄	北見工業大学 教授

### 【第15回検討会の議題】

- (1) 札内川自然再生（礫河原再生）事業の成果
- (2) 十勝川水系河川維持管理計画への札内川自然再生（礫河原再生）の取り組みの反映

### 【委員からの主な意見】

#### 議題(1)「札内川自然再生（礫河原再生）事業の成果」に関する意見

- ・平成28年出水後に河道が変化しやすくなったと整理がされているが、フラッシュ放流やそれによる流路維持が平成28年出水時の攪乱を促進し、流路変動が発生しやすい河道形成につながったのであれば、事業の成果としてアピールしたほうが良いと思う。
- ・平成28年出水のみの効果なのか、その前後の礫河原再生の取り組みが重要な働きをしていたのかは確定的には言えないと考えられるが、想定されるプロセスは整理したほうが良いと思う。
- ・チドリ類の生息範囲の拡大が生息数の増加に結びついている。イカルチドリとコチドリは体の大きさが異なり、体の大きなイカルチドリは礫の大きいところに営巣し、コチドリは

礫の細かいところに営巣する。このような礫の質が生息数の増加に影響している可能性が考えられる。

- ・ チドリ類の確認数が少ない KP24～KP33 付近の樹林の面積割合を下げるような取り組みを今後進めるという考え方もあると思う。
- ・ 『札内川における礫河原再生の技術資料（案）』は、今後の河川管理に役立つと思う。現在、河川管理の手法として確立されているものは、多くの取り組みの中の成功例である。一方で、様々な仮説を立ててうまくいかなかった取り組みも他河川での取組の参考になるので、失敗例についても整理した方が良いと思う。
- ・ 国内の他直轄事業でもダム放流による礫河原再生は行われているが、シルトや藻をフラッシュするものであり、札内川のような樹木管理を目的とした礫河原再生は国内でも珍しい。是非成果を多方面に発表してほしい。そのようにすることで、手引きや参考資料も活用されると考えられる。
- ・ 手取川は礫河原がきれいな川で、四国の那賀川も交互砂州の見本のような河川であった。一方、近年はどこも土砂供給や樹林化の問題を抱えている。これに対して、手取川では札内川と同じような引き込みを行っている。それぞれの事例を集積することで対応方法の議論ができるようになるので、是非成果を発信してほしいと思う。

#### 議題(2)「十勝川水系河川維持管理計画への札内川自然再生（礫河原再生）の取り組みの反映」に関する意見

- ・ 維持管理は変化がないことを確認するのも役割なので、対策実施候補箇所に加えて、現状で良い状態の箇所もチェックしたほうが良いと思う。また、UAV を使った河川巡視も進めるべきと考える。
- ・ 生物のモニタリング項目は水辺の国勢調査を活用したモニタリングを考えているとのことだが、チドリ類のように樹木が増えると生息環境が減る生物もいるので、樹林化の状況に合わせた調査を実施するべきと考える。

#### ■今後の予定

- ・ 本日の議論を踏まえ、『礫河原再生の手引き（案）』及び『札内川における礫河原再生の技術資料（案）』の見直しを行い、公表に向けた準備を進めていきたいと考えている。
- ・ 札内川の礫河原再生に関わる技術検討会は今回で終了となる。次年度も維持管理の一環として中規模フラッシュ放流を継続していく予定となっている。委員の皆様には、引き続きご指導をお願いしたい。

#### 【お問い合わせ先】

札内川技術検討会事務局：北海道開発局 帯広開発建設部 治水課 札内川技術検討会担当まで  
帯広市西5条南8丁目 TEL：0155-24-4105、FAX：0155-27-2377